MUV―LUV 世界の自衛隊の奮闘

島田愛里寿

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＭＵＶ―ＬＵＶの世界に桜セイバーの姿で転生した男が自衛隊を率いてＢＥＴＡ大戦の中で日本を生き残らせるために帝国軍や近衛軍、米軍及びこの世界の主人公がいる国連軍相手に奮闘する物語。

クロスオーバーは保険です。

原作崩壊が著しいためシリアスがないのがやな人はブラウザバック推奨です。

この小説は片手間で書いているので更新は不定期です。

題名を変更しました。

目次

設定　自衛隊の装備及び自衛隊の歴史 ―― 1
第一話　自衛隊の苦労 ―― 9
第二話　将軍前会議 ―― 12
第三話　御前会議とヨコハマ抜き打ち視察 ―― 14
第四話　自衛隊の実力 ―― 17
第五話　自衛隊と伊隅大尉の関係 ―― 22
第六話　１２．５事件前日の自衛隊の行動 ―― 25
第七話　１２．５事件勃発！米軍・国連軍との認識の違い ―― 28
第八話　航空自衛隊の虎の子！航空戦術実験飛行隊出撃！ ―― 31
第九話　自衛隊初の防衛出動命令発令!! ―― 35
第十話　狭霧部隊投降・イルマ・テスレフ少尉確保！ ―― 37
第十一話　自衛隊治安出動！・米国政府大パニック!! ―― 41
第十二話　ヨコハマ包囲 ―― 44
第十三話　後処理 ―― 47
トータルイクリプス編
前日談一話　近衛京都訓練校と自衛隊との交流会 ―― 50
人物設定 ―― 54
前日談二話　西住まほ連隊長 ―― 57

設定　自衛隊の装備及び自衛隊の歴史

【この世界の自衛隊の創設理由】

自衛隊は日本帝国がアメリカとの太平洋戦争で負けたのちに米軍が帝国軍と近衛軍を解体させるために創設するように指示したのだがその一週間後にアメリカは方針を転換し、対ソ連用に帝国軍と近衛軍を残しておくこととしたためこの時創設された自衛隊の母体の警察予備隊は宙に浮く状態になってしまい結局、五摂家の補佐役だった沖田家が預かることとなりそののちに将軍と五摂家及び政府の腐敗に心を痛めた天皇家と当時の沖田家当主の判断で沖田家は天皇家直属となりその時に保安隊と海上警備隊、そして航空警備隊を創設した。そしてＢＥＴＡとの月面での接触を受けこの一年前に早死にした先代に代わり沖田桜は全部隊を『自衛隊』と名称を変更し、全部隊の装備の更新を行い訓練を繰り返し帝国軍や近衛軍を上回る練度を目指した。そうしてＢＥＴＡが中国に降下した時には練度に関しては世界一であった。

【帝国軍と近衛軍との関係】

基本的に険悪。

自衛隊としては協力し共に祖国を守りたいと考えてはいるのだが戦闘に参加するたびに戦果を奪われその戦闘でまずいことがあればすべて押し付けられる上に近衛軍から優秀な隊員の提供命令がしょっちゅう来るので幹部から三等陸士に至るまで帝国軍と近衛軍を嫌っている。（ただし一部の良識ある帝国軍人との仲は基本的に良好）

【この世界の自衛隊への入隊方法】

ＢＥＴＡに侵攻される前は基本的に志願制で学歴が足りないとしても入隊までの期間で基本的な知識は教育してくれていた。しかし、ＢＥＴＡ侵攻後はほとんどの優秀な候補生が帝国軍にとられた挙句、残っていた優秀な隊員は近衛に奪われそうになっている、そのために日本各所にある難民収容所で入隊受付所を設置し、難民だろうが孤児だろうが経歴が怪しくなくかつよその工作員でなければ基本的に入

隊を許可している。（工作員だとばれた際は言葉にできないような拷問を尋問部隊から受けることとなる）

【レイバー】元ネタ［機動警察パトレイバー］

この世界で自衛隊が簡易戦術機として開発した機体。

［９７式戦闘レイバーＡ型、アトラス］

自衛隊が初めて開発したレイバーにしてレイバー隊の基礎となった機体。

戦術機が戦闘機をもとに開発されたのに対して自衛隊は装甲車両をもとに開発したため戦術機と比べるとかなり不格好である。しかも複座な上にコックピットは防弾ガラス式のキャノピーなのでＢＥＴＡに対しての防御力が初期から不安視されＢ型とＣ型の開発につながった。

隊員からは「装甲車に毛と足を生やしたらアトラスだ」なんて呼ばれるが古参の隊員達からは愛されている。

初実戦は九州防衛線、朝鮮半島から侵攻してきたＢＥＴＡに対して西部方面隊がこれを総動員して帝国軍と初めて協力しＢＥＴＡに立ち向かった。これにより避難民の避難とＢＥＴＡの中国地方と四国地方への侵攻するまでの時間を稼いだが西部方面隊は帝国軍九州防衛軍とともに玉砕した。

〈武装〉

・高性能長砲身２０ミリガトリング砲

ドイツのラインメタル社に自衛隊が発注しライセンスも譲ってもらった。

このバルカン砲は威力が過剰ともいえるほどでありＢＥＴＡの突撃級が相手でも正面から一か所に集中砲火すれば貫通可能である。

・多目的対戦車対戦術機用ロケットランチャー

面制圧用のロケット発射機だが，当たれば，第二から第三世代の戦術機を撃破できるかも？

［９７式戦闘レイバー改（Ｂ型）サムソン］

アトラスを単座型に変更し、コックピットを装甲化した機体。

この機体から自衛隊技術本部が開発した９０ミリバルカン砲を装

備し始めた。
　しかしこのせいでロケット発射機が外され機体上部の小回りが悪くなり、Ｃ型の開発につながった。
〈武装〉
・超砲身９０ミリ（６０ミリ）ガトリング砲
　防衛技術本部が現場からの『高性能長砲身２０ミリガトリング砲は優秀だが固定式だから使いづらい！手持ち式の大口径型を求める！』という無茶な要望に応えた結果開発された。三連の９０ミリが主流だが手数を増やしたい一部の部隊用に八連の６０ミリ型もある。
［９７式戦闘レイバー改（Ｃ型）ハンニバル］
　Ａ型・Ｂ型の問題点を解決するために開発された９７式戦闘レイバーシリーズの完成型。
　主要武装の変更を現場でできるようになったため現場からの評価は高い。
〈武装〉
・超砲身９０ミリ（６０ミリ）ガトリング砲
　サムソンのものとほぼ同じ
・高性能２０ミリバルカン
　アトラスが使っていたものを３連に砲身を減らし、口径長を短くしたため近接防御用に非常に優秀。ただ超砲身９０ミリ（６０ミリ）ガトリング砲を使うときは邪魔になるので外さなければならない。
・対戦車及び対ＢＥＴＡ用三連装ミサイランチャー
　両腕部に装着式で搭載されているミサイルランチャー。［ＡＨ―８８ヘルハウンド］との共通化が図られている。
［９９式ヘルダイバーＡ型・Ｂ型・Ｃ型・Ｄ型］
　自衛隊が戦術機［激震］を見てから新規開発した人型の機体。人型になったため多目的な作戦に参加できる傑作機。もともとは『レーザー級が出てくる前に空挺強襲すればいい!!』などというやっつけ的な考えから開発が始まったがすぐに開発目的が変更され、多目的マルチロールのような運用を目指した。
・Ａ型

最初に開発された機体。試験部隊しか装備しておらずC型・D型の開発に流用されたため一機しか残っていない。

・B型

同時に開発されたC―4輸送機で運用する空挺作戦用の機体。

習志野の第一空挺団の強襲レイバー大隊にしか配備されていない、空挺用なので基本的に装甲は薄い。

・C型

装甲強化型の改修型であり普通科連隊の装甲化偵察隊に配備された機体。基本的に配備されているのはこの機体。

・D型

C型の複座型であり、女子戦車連隊に装備させるために開発された機体。

まだ千葉の知波単連隊しか試験運用されていないが評価は高いのでそのうち本土の女子戦車連隊すべてに配備される予定。スモーク弾発射機等が追加装備されている。

〈武装〉

・40ミリ速射機関砲

ヘルダイバーの基本的な装備であるとともに自衛隊機を代表する銃器。

・特大型99式自動小銃

89式小銃をレイバーサイズに大型化した物。20式小銃型も開発中である。

［HAL―X10］

自衛隊が虎の子として極秘開発していた対戦術機対レイバー対戦車を想定した自衛隊最強の四足歩行の機体。もともとは対BETA専用機だったがアメリカの〈F―22A〉開発の情報を受け、コンセプトが急遽変更された経緯がある。

第十四旅団所属の機体数機がヴァルキリーズ及び207衛士訓練部隊並びに第19独立警護小隊との演習で撃破判定を受けたがこれは対戦術機用のOSの開発が終わっていなかった事が原因でありこの演習でOSの開発が成功し正式に［05式重戦闘レイバー］となっ

たが対ＢＥＴＡ戦に試作機用の名前で投入され続けていたことでこの名称が浸透するには時間がかかると見込まれている。（言いやすいのもあるが）

〈武装〉

・１５２ミリガンランチャー

対戦車・対ＢＥＴＡ・対戦術機用の高性能ガンランチャー。直撃すれば突撃級でも一発で正面から撃破可能（！）。ただし取り回しが大変。

・短砲身２０ミリ対空バルカン

ハンニバルが使用している２０ミリバルカンをさらに短くしたうえで機体本体に埋め込み式で搭載されている。

・スモーク弾発射機

１２発装備されている

・多目的ロケット発射機改

アトラスのものをもとに再設計されたもの

〈特殊装備〉

・ホバーシステム

自衛隊が世界で初めて戦術機以外での開発に成功したシステム。これにより機動力の向上と戦術機用のエンジンを搭載したことで稼働時間の拡大につながった。

・ローラー走行システム

四足機ならではのシステム。ローラー走行により戦略機動力が上がった。

「９８式戦闘指揮レイバー，ラーダー，」

戦車隊やレイバー隊の機動防御時の指揮に今までの８２式指揮通信車では手が回らないうえにＢＥＴＡへの自衛能力が乏しすぎるために新規開発された六足式の機動型レイバー。

指揮用なので武装は本当に自衛用のみ

〈武装〉

・高性能２０ミリ機関砲

８７式偵察警戒車が装備していた砲塔をもとに開発された。突撃

級以下のＢＥＴＡなら相手にできる。

【特殊試作レイバー】

試験的な意味合いから試作されたレイバーシリーズ

・ドシュカ

ソビエト戦車系の技術を使用して試作・生産された四足歩行型の機体。

北部方面隊から『［ＨＡＬ－Ｘ１０］の正式化を待つよりも今すぐに強力な機体が欲しい！』との要望を受けて緊急試作された機体。意外に北方方面での実績が良かったので北部方面隊限定用として正式化。（ところがこの機体性能を見て驚いた極東ソ連軍の高官から『売ってくれないか？』と言われたので政府にも極秘でソ連軍用に調整した機体をソ連軍向けに販売している）ところが試作機用の塗装の赤色をそのままにしたため遠くから見ると戦車級に見えなくもないことから誤射事故が相次ぎ、急いで北方用の白色に変更したという逸話がある。

・ブロッケン

ドイツ系の技術を利用して開発された機体。熊本女子戦車連隊が一時的に試験運用したが連隊長の西住まほ一等陸佐と副官の逸見エリカ二等陸佐から『日本の国土に適していない』と言われたため欧州派遣の帝国軍に押し付けられた不遇の傑作機。（ところがこの機体も西ドイツ国防軍とＮＡＴＯ各国が『売ってくれ!!』と強く要望したため、西ドイツ用とＮＡＴＯ用の機体が販売された。）

【戦闘ヘリ】

今の自衛隊には二種類くらいしか戦闘用のヘリはなく、他は輸送用のＣＨ－４７改や偵察用のＯＨ－１改とＯＨ－６改しかない。

［ＡＨ－８８ヘルハウンド］元ネタ（劇場版パトレイバー１及び２）

自衛隊が今も運用している傑作機。

〈武装〉

・２０ミリバルカン

・ヘルファイヤ対戦車ミサイル

・対地ロケットポット

・ＳＡＭ対空ミサイル
［ＡＨ―８８Ｊ２改グレイゴースト］元ネタ（実写版機動警察パトレイバー首都決戦）
ヘルハウンドを徹底的に改修しほぼ別物となった機体。武装はほぼ同じだがすべて格納式となっており、ステルス化が図られている。
〈特殊システム〉
・灰色幽霊
機体の愛称のもととなったシステム。機体全面に光学迷彩用の液晶パネルを装備しており対レーザー級用に開発された。ただこのシステムの稼働時は敵味方ともに位置がわからず衝突しかねないので味方陣地上空では機体の端灯を付けることを厳命されている。
〈経歴〉
初実戦は１２．５事件。米陸軍第６６戦術機動大隊を後方から独断でこっそりつけていたのだが
イルマ・テスレフ少尉がＣＩＡ工作員によって発砲しようとしたのを見て処罰覚悟でヘルファイヤミサイルを発射。これによりイルマ・テスレフ少尉は死亡せずアメリカの悪行と工作の証人及び証拠を押さえることに成功した。
【航空自衛隊・海上自衛隊】
海自の艦艇は現実の２０２２年現在とほぼ同じである。
空自は輸送隊と航空戦術実験飛行隊のほかはほとんど行動できていなかったがグレイゴーストシステムの実用化に伴い『強い空自』の復活の兆しが見える。
【輸送機隊】
独自開発のＣ―４輸送機とＡＮ２２５ムリヤを運用している
［Ｃ―４輸送機］
９９式ヘルダイバーを運用すべく開発された大型ＳＴＯＬ機。ヘルダイバーが３機空挺輸送できる。
【航空戦術実験飛行隊】
自衛隊唯一の戦術機部隊
帝国軍との粘り強い交渉で戦術機Ｆ―１５ＪとＦ―４Ｊを入手し、

独自改修を行ったＦ―１５Ｊ改＋と
Ｆ―４ＥＪ改、そしてＲＦ―４ＥＪ改を装備する部隊。
［Ｆ―１５Ｊ改＋］
Ｆ―１５Ｊ改＋と帝国軍のＦ―１５Ｊの違いは、まず標準武装として９９式ヘルダイバーが標準装備としている、４０ミリ機関砲を右腕に装備！そして対戦術機用の強力な武装として『０４式空対空誘導弾』を肩部の専用の発射機に装備している。一応近接用の大型刀も装備はしているが近接戦は最後の手段と考えている自衛隊内ではあまり好まれない。（ちなみに機体色は陸上自衛隊の濃緑色がメインです）
［Ｆ―４ＥＪ改］
Ｆ―４Ｊ激震との見た目上の違いは色が濃緑色なことくらいだが武装がＦ―１５Ｊ改＋と９９式ヘルダイバーとの共通化が図られているのと武装の多様化を模索中
［ＲＦ―４ＥＪ改］
Ｆ―４ＥＪ改を偵察兼弾着観測用に改修した機体。はやぶさ二等空佐が専用機として使用しており１２．５事件でのアメリカの悪行を記録していたのもこの機体。

第一話　自衛隊の苦労

沖田「あーあ、どうして、帝国軍や近衛軍、そして政府の上層部は米帝の言いなりなんでしょうかね～。」

あ、申し遅れました私、Ｍｕｖ―Ｌｕｖの世界にＦａｔｅシリーズの桜セイバーの姿で転生した元男です。この世界の沖田家は五摂家の補佐役の立場に昔はいたようなのですが今は天皇陛下の直属の部下みたいな感じのようです。（原作だと皇帝だった気がしますが、ややこしいので天皇家にしてます。）

琥珀「お嬢ー様！また征夷大将軍と五摂家から出頭と自衛隊が勝手な行動をとったことに説明を求めると電報が!!」

沖田「またですか!?翡翠さん、返信として『現場の自衛隊員の苦労をわからん馬鹿どもは現場で一週間三等陸士としてＢＥＴＡとの戦いに参加してから文句を言え！』と返信してください。それか『文句を言うならまともな物資の補給をまわせ!!。』と。」

翡翠「かしこまりました。」

沖田「それとアルトリア、中部方面隊の『レイバー』の稼働可能機体の数は？」

アルトリア「はい、９９式ヘルダイバーが４５機・ＨＡＬ－Ｘ１０が３５機・９７式改Ｃ型ハンニバルが２９機・それと予備機の初期型９７式アトラスが１９機です。」

ちなみにこのアルトリアは型月シリーズの青セイバーそっくりで自衛隊最高司令官である総合作戦本部長に私が父のあとを継いで着任したころに孤児だったのを拾って妹のように育てていたらいつの間にか自衛隊に入隊していて、２～３年で私の一つ下の陸将補に就任し中部方面隊司令官になっていて驚いたんですよねぇ～って！

沖田「はあ!?、待ちなさい！一週間前はヘルダイバーは東部方面隊からかき集めて９５機はあったでしょう!!それにＨＡＬ－Ｘ１０もかき集めて６９機はあったはずですよ!!」

アルトリア「そ、それが帝国軍と近衛軍の現地司令官の横暴で無理やり出動させられた挙句、盾にされ戦果も帝国軍と近衛軍にすべて奪

われたうえ山分けされ全責任を押し付けられ現地の駐屯地司令官の自殺未遂が相次ぎその混乱で報告が遅れたと。」
沖田「な、なんですって⁉琥珀さん！将軍と帝国軍および近衛軍司令官に抗議文と損害賠償請求を!!ただでさえ我々の『レイバー』はＢＥＴＡとの戦いに向いてないというのに。」
アルトリア「沖田統合参謀本部、このままでは中部方面隊の予備部隊さえも戦線に投入せざるおえなくなりますよ！」
沖田「分かっています！しかし、予算はヨコハマの国連軍に大半を取られているうえに貴重な予算を帝国軍と近衛軍に奪われてはレイバーで代用するしかないんです!!。」
翡翠「ＨＡＬ－Ｘ１０ですら開発段階での妨害工作で公表スペックを引き下げなきゃならなかっんですよね。」ハァ
琥珀「一応次期主力機の戦術機モドキは設計と研究を続けさせてますけどねぇ。『不知火』の模造品しか作れないそうですよ、あ、あと９８式戦闘指揮レイバーの『ラーダー』と北部方面隊用にソビエト戦車モドキの『ドシュカ』の生産が何とか軌道に乗ったそうです。欧州向けの『ブロッケン』は欧州派遣の帝国軍に送りつけました。」
沖田「琥珀さんよくやりました。」
ここでこの世界の自衛隊の状況を説明しよう。この世界の自衛隊は日本帝国がアメリカとの太平洋戦争で負けたのちに米軍が帝国軍と近衛軍を解体させるために創設するように指示したのだがその一週間後にアメリカは方針を転換し、対ソ連用に帝国軍と近衛軍を残しておくこととしたためこの時創設された自衛隊の母体の警察予備隊は宙に浮く状態になってしまい結局、五摂家の補佐役だった沖田家が預かることとなりそののちに将軍と五摂家及び政府の腐敗に心を痛めた天皇家と当時の沖田家当主の判断で沖田家は天皇家直属となりその時に保安隊と海上警備隊、そして航空警備隊を創設した。そしてＢＥＴＡとの月面での接触を受けこの一年前に早死にした先代に代わり沖田桜は全部隊を『自衛隊』と名称を変更し、全部隊の装備の更新を行い訓練を繰り返し帝国軍や近衛軍を上回る練度を目指した。そうしてＢＥＴＡが中国に降下した時には練度に関しては世界一で

あった。そしてアメリカが戦術機を開発したという情報を仕入れるとそれを参考に簡易戦術機ともいえる『９７式レイバーアトラス』の開発を成功させたもののコックピットが防弾ガラス張りなので一部の搭乗員からは『足の生えた装甲車』と馬鹿にされたが朝鮮半島からＢＥＴＡが進行してきたときには近接戦闘メインの激震とのコンビネーションで民間人が避難する時間を稼ぐことに成功し当時の西部方面隊は玉砕した。

沖田「にしても、いくら独断かつ秘密裏に戦術機をモドキとはいえ開発していたことに対する嫌がらせを首都の京都を失ったこの時でもやりますか。」アタマいたい（＞＿＜）

アルトリア「まったくですね。」

沖田「どうしたものか。」

第二話　将軍前会議

煌武院　悠陽「ＢＥＴＡとの戦いで常に忙しい皆に集まってもらったのはほかでもない。香月博士より報告があるとのことだ。」

香月博士「はい、オルタネイティブ４計画の進捗が進んできたのでそのことを日本の首脳陣の方々に先に報告させていただきます。」

首脳陣「「おお！」」

大蔵大臣「ようやくですな！」

外務大臣「これで国連議会での立場もよくなるでしょう！」

帝国軍長官「うむ！これで戦場で散っていった者たちに顔向けできる！」

近衛軍長官「まったくですな！」

「「はっはっはっは」」

こいつらは（#^ ω^）

沖田「ゴホン#」

「「!!??」」

沖田「あなたたちはこれしきの事で明るい未来に向かえると本気で考えているのですか？でしたら今すぐ自衛隊総合病院に入院をお勧めしますよ。（#^ ω^）」

帝国軍長官「な、なにを言っている！沖田統合作戦本部長!!」

近衛軍長官「そうだ！そもそもお前たち自衛隊はなんのやくにも・・・」

沖田「ほう（#^ ω^）。では一週間前に帝国軍と近衛軍の現地司令官の独断で無理やり出動させられ自衛隊中部方面隊のレイバー隊のヘルダイバー４０機、ＨＡＬ－Ｘ１０が３４機もＢＥＴＡに破壊された挙句それに謝罪の連絡もよこさず我々自衛隊の戦果を横取りし、全責任を現地の駐屯地司令官に押し付けた帝国軍と近衛軍はどのような責任をとってくださるのですかな（#^ ω^）。」

近衛軍長官「そんな報告は受けていない！」

沖田「まあそうでしょうね。おたくの司令官が緘口令を敷いていたらしく、私もこの事実の報告を受けたのが昨日中部方面隊司令官が

『現地の駐屯地司令多数が自殺未遂を起こした』という報告を受けてからですし。というわけで帝国軍と近衛軍には戦死した隊員全員分の遺族年金と機体代金全額損害賠償として払ってください。我々の予算ちょろまかしているのバレバレですからね。」ボソッ「覚悟しとけ(#　。Д。)」

帝国軍長官・近衛軍長官「「ななな」」

沖田「それと香月博士！」

香月博士「は、はい？」

沖田「あれだけの予算使ってよくのうのうと報告できますね！というかあまりにあなたたちヨコハマがなんの成果も出さないもんだから東部方面隊の警務隊がおたくに強制捜査を行わせてくれって本部長室に一個小隊で殴りこんできたこともあったんですよ!!こんなところでどや顔で報告する暇があるんだったら今すぐあなたのねぐらのヨコハマに戻ってまともな成果を出しなさいこの無能ども!!」

月読「沖田！殿下の御前で無礼であるぞ!!」

沖田「月読！ヨコハマにしょっちゅう出入りしているお前は黙っていろ!!こっちはおまえら近衛軍のせいで予算が減らされ部隊も減り続けているんだ！こんなところでないと文句もいえない我々の状況もわからんほどに落ちぶれたか貴様!!」

煌武院　悠陽「沖田統合作戦本部長、貴方の意見はよくわかりました。帝国軍長官、近衛軍長官、直ちにその現地司令官の処分と賠償金、および戦死された隊員の遺族年金を支払うように。それから沖田統合作戦本部長、香月博士は何も分かっていないＢＥＴＡ相手の研究で成果をあげられたのですそこを非難するとは何事ですか。」

沖田「・・・わかりました。香月博士謝罪いたします。それと各長官、賠償金も謝罪も一週間たっても来ない場合は東部方面隊の普通科一個連隊をあなたたちの司令部に送り込むのでそのお覚悟で(#^ω^)。」

そうして将軍前会議は終わった。

沖田「さて、このあとは御前会議に出なきゃならないとは陛下直属も大変ですよぉ」

第三話　御前会議とヨコハマ抜き打ち視察

沖田「陛下、御呼びとの話を受け参上致しました。」
天皇「うむ、沖田統合作戦本部長。現在の自衛隊の状況をお主自身の口から聞きたくてな、どうなっているか？」
沖田「は。　帝国軍と近衛軍の嫌がらせと同じような無茶振りで、中部方面隊の戦闘能力が半減しました。」
天皇「なんだと！」
沖田「しかし、将軍前会議でその事を抗議したところ将軍から損害賠償を行えと帝国軍と近衛軍の長官に命令が出ましたのでなんとかします。」
天皇「そうか、お前達沖田家には迷惑をかけてばかりで申し訳ないな。」
沖田「いえ、　それが我々自衛隊の宿命でもありますから。」
御前会議後
沖田「やれやれ、陛下もずいぶんと怒っていらっしゃったな。」
アルトリア「まあ、当然かと。しかしあそこまで一自衛隊員のことを思いやっていただけるとは」
沖田「　陛下はお前達が思ってるよりも寛明な御方だ。常々ＢＥＴＡとの戦いで散っていっているもの達の冥福を祈って下さっているのですよ。」
翡翠「本部長、この後は？」
琥珀「も～、翡翠ちゃん。忘れたんですか？ヨコハマの抜き打ち視察に行くんですよ。」
アルトリア「ああ、あの予算を無駄に浪費する連中をですか。」
沖田「まあまあ。たしかにあの膨大な予算を何に浪費しているのかわからない連中ですが香月博士の頭脳は世界一ですから認めざるを得ないんですよ。」
アルトリア「しかし、すでに中部方面隊でも不満が限界なんですけど。」
沖田「そこでです。視察の際にあちらの戦術機部隊をあおり散らし

てくれません？」
アルトリア「は？まあ構いませんが。」
琥珀「な～るほど！。国連お抱えの戦術機部隊を中部方面隊並びに東部方面隊の合同戦闘訓練になし崩し的に巻き込むと！」
沖田「そう言う事です。そうすれば隊員達の不満も多少なりとも解消される上にヨコハマの戦術機部隊の実力もわかるというものです。」
アルトリア「なるほど！わかりました!!。協力させていただきます！『姉さん』！」
沖田「あ、久しぶりにその呼び名使ってくれました。」
タケルｓａｉｄ
香月博士「というわけで自衛隊のお偉方と第一空挺団のレイバー隊が今日視察に来るそうよ。あまり失礼のないようにね。」
タケル「なあ冥夜、なんで月読さんたちはあんなにピリピリしてんだ？」
冥夜「おまえ。あのなこの間の将軍前会議の話を聞いてないのか？」
榊　千鶴「なんでも沖田統合作戦本部長が帝国軍と近衛軍の長官に賠償請求をして博士を無能呼ばわりしたことを月読さんたちと神宮司隊長はおこっているのよ。」
な！、夕呼博士を無能呼ばわり!?そりゃあおこるわ。
沖田「失礼する。」
！
香月博士「あら!?もういらしたのですか？予定まであと一時間はありますけど。」
アルトリア「それはあななたちが証拠隠滅しかねないからですよ。一応第一空挺団のほかにも東部方面隊の警務隊一個中隊を連れてきたのであの膨大な予算を何に使っていたのか洗いざらい調べさせていただきますよ!!」
な！なんて言いぐさだよ!!
神宮司「ちょっと待ってください。ここは国連軍管轄の施設です

よ、勝手なことはおやめいただきたい!!」
さすが委員長
アルトリア「それは失敬。警務隊を入れるのはやめときましょう。ですが軍曹の立場で上官にその物言いは何ですか!!」
神宮司「どういうことですか?」
アルトリア「私は中部方面隊司令官のアルトリア陸将補!!つまりあなたたちの基準で言うところの少将から中将にあたる立場の人間なんですよ!国連軍に居続けてそんなことも忘れたか身分をわきまえなさい!!」
なっ!中将!!
神宮司「し、失礼いたしました。」
沖田「陸将補やめなさい。早速問題をおこすつもりですか?ただでさえここの国連軍の戦術機部隊は無能のかき集めなんて自衛隊内部から呼ばれているのに。」
冥夜「どういうことですか!?」
ちょっ、冥夜!!
アルトリア「そのままの意味ですよ。予算を食いつぶすだけでまともに戦闘をしない部隊はそういわれて当然です。」
琥珀「陸将〜!ここのデータ洗いざらい見てきましたが新開発のＡＩがありました〜。」
翡翠「まったくここの戦術機部隊の衛士は怠け者ですか?私と姉さんが隊服を着ていてしかも大佐待遇なのに私たちが注意するまで敬礼もしませんでしたよ。」
アルトリア「はっ、ここの衛士たちの実力は補助ＡＩのおかげでまともな戦闘もできないというわけですか。」
タケル「好き勝手いうんじゃねえ!」
アルトリア「ほう、威勢のあるガキンチョもいるじゃあないですか。陸将、でしたら。」
沖田「まったくもう。まあいいか神宮司軍曹我々は貴隊に中部方面隊及び東部方面隊の合同部隊との戦闘軍事演習を行ってもらう。そこまで言うのならな!」

第四話　自衛隊の実力

長尾「東部方面隊第一師団第一普通科連隊並びに混成団、茨城女子戦車連隊と第一空挺団レイバー隊到着しました！」

沖田「ご苦労様です。今回は国連お抱えの戦術機部隊相手ですが、いくら中部方面隊からも参加する部隊があるとはいえ大丈夫ですか？」

長尾「にゃっはは。大ジョーブですよ。ただ東北方面隊の青森女子戦車連隊のちびっこ隊長が、私も連れてけ！‘とごねましたが。」

沖田「まったくもう。優秀なんですが少し子供っぽさが残っているのがまた、まあ実力と人望は旧熊本女子戦車連隊の西住まほ一等陸佐と同じくらいあるので問題ないですが。」

この～女子戦車連隊というのは自衛隊独自の編成部隊で現地出身の女性隊員のみで戦車隊を編成、チームワークを高め部隊の花とするものである。とはいえ実力は普通の戦車隊以上のところも少なくなく隊服もある程度自由にできる。（ガルパンの各戦車道チームをイメージしてください。）

長尾「あの、まほ一等陸佐が死亡したかのような発言はやめてくださいよ。」

沖田「あ、すみません。」

この旧熊本女子戦車連隊は西部方面隊に所属する部隊の中では数少ない残存部隊の女子戦車連隊である。残存部隊のほとんどは本土にいたのだがこの旧熊本女子戦車連隊は避難民が渡る大橋の守備部隊であり避難民が全員渡りきるまで橋を守り切り一両の損害もなく本土に撤退せしめた最精鋭部隊なのである。

長尾「ところで中部方面隊からくる部隊と中部方面隊司令官は？」

アルトリア「ここですよ。」

沖田「アルトリア陸将補。遅かったようですが何かありました？」

アルトリア「いえ、この間の帝国軍と近衛軍の無能司令官が逃げようとしていたのでその処理を。」ニッコリ

沖田・長尾（ウワ～）

おそらくその無能司令官は死を懇願したくなるような仕打ちを受けているのだろう
アルトリア「あ、陸将。第十師団の石川女子戦車連隊と第十四旅団の第十五即応連隊とレイバー隊到着しました。」
沖田「あっ、了解しました。しかし石川女子戦車連隊を抜いて大丈夫ですか？」
アルトリア「大丈夫です！帝国軍と近衛軍を脅し、ゲフンゲフンＯＨＡＮＡＳＩして協力を取り付けました!!」
沖田・長尾（ウワーまずいまずい！）
沖田「まっまあいいでしょうところで話は変わりますが旧西部方面隊所属等の女子戦車連隊の様子は問題ありませんか？」
アルトリア「ええ、一部ＰＴＳＤの可能性がありましたので統合病院に休養のために入院させましたが佐世保連隊・熊本連隊・岡山連隊・鳥取連隊・神戸連隊・和歌山連隊はともに中部方面隊直属部隊として即応できるようにしてあります。」
（ちなみにこの地名はガルパンで各校の所属していた県です）
沖田「よし。さてこれが伊隅戦乙女隊（ヴァルキリーズの事）及び第２０７衛士訓練部隊が送ってきた向こうのメンバー表だ。」
アルトリア・長尾「「どれどれぇ？」」
・・・・・・・・・
アルトリア「なめてるんでしょうか？」
長尾「こちらは四個連隊と二個戦闘団、そして二個レイバー隊を動員したというのに十機のみとは。一応第１９独立警護小隊の武御雷が四機追加で参戦しているようですが遠距離戦主体の我々に近距離まで近づけたとして何機生き残っていることやら。」
沖田「まあ何か策や特殊なＡＩでも積んでいるのかもしれんが我々はこれを実戦と考え全力をもって叩き潰す！各員にもそう伝えておくように。」
アルトリア・長尾「「了解!!」」
タケルｓａｉｄｏ
伊隅「相手は遠距離戦主体の実戦経験豊富な部隊がそろっているん

だぞ！なのにどうやって接近戦に持ち込む！」
神宮司「しかし、そうしなければ全滅の恐れもあります！。」
月読「その通り。それに機動力で相手に無駄弾を打たせれば突入の成功率も高まる。」
月読さんたちはさっきからずっと作戦会議をしているがヴァルキリーズの伊隅隊長が委員長たちの作戦にずっと反対していて一向にまとまらない。
伊隅「駄目だ！お前らは自衛隊の実力をわかっておらん!!」
鎧衣　美琴「あの～伊隅大尉？なんでそんなに自衛隊を恐れているんです？やってみないとわからないじゃないですか？」
タケル「そうですよ！いつまでも弱気じゃあ勝てません！」
伊隅「なにもしらん者たちは黙っていろ!!っく沖田統合作戦本部長、よりにもよって女子戦車連隊を二個もぶつけてくるとは！。」
あ、あの～
伊隅「なんだ!?」
秋山「ひぃ!!す、すみません」
伊隅「あ、いや今のは私が悪い。で、なんだ？」
秋山「はっはい！私は茨城女子戦車連隊の秋山と申します。統合作戦本部長からあと五分で演習開始のための挨拶が行われるので来てほしいとのことです。」
伊隅「なにっ、もうそんな時間か分かった急いでいくと伝えてくれるか？」
秋山「了解であります！」
伊隅「はあ、しかたあるまいお前たちの作戦に乗ってやる。ただし叩きのめされるのを覚悟しておけよ。」
伊隅隊長はそういって会場に向かっていった
タケル「伊隅隊長はなにを恐れているんだ？」

沖田ｓａｉｄｏ
沖田「やあー。伊隅大尉お久しぶりですねぇ！随分お疲れのようですが回りに振り回されているんですか？」

伊隅「いえいえ、ただ同僚の頭の固さと部下の無知っぷりに疲れ果てたんですよ」
沖田「あー、なるほど。気持ちはなんとなくわかります今度私的な立場で長尾陸将補と酒でも飲みませんか。」
伊隅「いいですね。お願いします。」
沖田「まあ互いに課題が見つけられるような合同演習にしましょう！」
蝶野「ではこれより陸上自衛隊選抜部隊対ヴァルキリーズ及び第１９独立警護小隊の演習を行います。一同！令！」
『宜しくお願い致します。!!』
沖田「各員！搭乗始め!!」
『応!!』
伊隅「各員！搭乗後指定ポイントに移動だ！」
『了解！』
伊隅（掛け声ややる気、演習に臨む気合の入れようからこちらが劣っているのは明白か。だがある程度はできるところを見せんと沖田陸将に顔向けできん！）
茨城女子戦車連隊ｓａｉｄｏ
磯部『こちら茨城戦車連隊偵察中隊！。ヴァルキリーズを発見しました！』
西住みほ「了解しました。では作戦通りかく乱の砲撃を、撃破可能だったら武御雷一機はつぶしてください。」
磯部『了解！各車攻撃はじめ！』
ドガアアアアン
『第１９独立警護小隊所属、戎　美凪機行動不能判定！』
西住みほ「よくやってくれました！では作戦通りに。」
磯部『了解』
ここで女子戦車連隊の主力戦車を紹介しておこう女子戦車連隊の戦車は千葉の知波単部隊は７４式戦車をまだ使っているがほかの部隊は北部方面隊所属や青森女子戦車連隊は９０式戦車を他は最新鋭の１０式を装備している。（最近知波単でも１６式機動戦闘車に変更

する動きがある）
タケルｓａｉｄｏ
『第１９独立警護小隊所属、戎　美凪機行動不能判定！』
なっ！
もうかよ！
伊隅『各機！これは敵側のかく乱だ落ち着け!!』
月読『神代、巴、落ち着け！』
神宮司『２０７各機！状況を！』
まずい指揮をとる委員長たちも伊隅隊長以外混乱してる！
珠瀬『た、隊長！敵の戦車隊が撤退していきます！』
彩崎『逃がすか！』
神宮司『ま、まて！』
彩崎『う、うわぁ！待ち伏せ！ガガ・・・』
『第２０７小隊彩峰　慧搭乗機　行動不能判定！』
ど、どうなってんだよ。

そうして国連お抱えの戦術機部隊は各個撃破されることを恐れて密集体系で接近戦に持ち込むために突撃を狙うがそこを裏に回り込んだ第一空挺団のヘルダイバー隊と第十四旅団所属のＨＡＬ－Ｘ１０の奇襲攻撃を受け隊列がバラバラになったところを第一普通科連隊の８９式ＦＶと第十五即応連隊に各個撃破された。

第五話　自衛隊と伊隅大尉の関係

沖田「いや～。お疲れ様です、伊隅大尉！さすがはヴァルキリーズですね、第一空挺団のヘルダイバーが５機もやられるとは。」

伊隅「いえいえ。そちらこそ流石ですね、こちらが一点突破をするために集結したタイミングで後方から奇襲とは。」

沖田「いやいや。私たち首脳部は一枚も作戦に噛んでませんよ、茨城女子戦車連隊隊長の西住みほ一等陸佐と石川女子戦車連隊隊長の島田ミカ一等陸佐にすべて任しましたから。」

伊隅「やはりまほ一等陸佐の妹さんでしたか。さすが軍神といわれるだけはありますね。」

沖田「ただいくら訓練中隊とはいえ勝手に行動する連中はどうにかしたほうが良いのでは？」

伊隅「まったくです、もう少し厳しく教えるべきでした。」

神宮司「あの、伊隅大尉？沖田陸将とお知り合いなのですか？」

伊隅「ああ、九州防衛線と京都防衛線で自衛隊の英雄のまほ一等陸佐と富士教導団に助けられたからな。」

神宮司「え！」

九州防衛線時

伊隅「くっ。撤退だ！自衛隊の部隊にも連絡しろ！。」

部下１「そ、それが陸上自衛隊熊本女子戦車連隊隊長のまほ一等陸佐が撤退を拒否しています。」

伊隅「なんだと！おい！まほ一等陸佐！今すぐ橋を破壊しろ！本土にＢＥＴＡを渡らせるわけにはいかん！」

まほ一等陸佐『無理だ』

伊隅「なんだと!!」

まほ一等陸佐『今、避難民の最後の組が橋を渡っている最中だ。それに貴隊もわたっておらんだろう。』

伊隅「我々は戦術機部隊だ！飛べば何とかなる！だｋ『レーザー級がいたらどうするつもりだ？』っぐ。」

まほ『ん、今避難民の避難が終わった！今すぐわたってこい!!橋の

九州側にいる逸見小隊とともに後退しろ！急げ!!逸見！聞いていたな！」
逸見『はい！了解です隊長!!』
伊隅「わ、分かった！各員！橋に向かうぞ！」
隊員全員「「「「了解」」」」」
そうして逸見小隊とともに橋を渡り切った直後に橋を落としＢＥＴＡが中国地方に来る時間を稼ぐことに成功した。
現在
神宮司「そんなことが」
伊隅「ああ、それ以来私は自衛隊と交流があったしなにかと融通をつけては共に訓練内容の相談をしていた。」
沖田「にしても、ＨＡＬ―ｘ１０もまで撃破するとは！伊隅大尉、腕を上げましたねぇ！」
そう、伊隅大尉は後方に回り込まれてもなお落ち着いており、第一空挺団のヘルダイバー５機と第十四旅団所属のＨＡＬ－Ｘ１０を二機撃破判定に持ち込んだのである。（ちなみにこれに近い戦果を出したのは月読中尉のヘルダイバー３機撃破判定と白銀　武訓練生のＨＡＬ－Ｘ１０一機中破判定、そして神宮司軍曹のヘルダイバー２機撃破判定・ＨＡＬ－Ｘ１０一機小破判定のみである）しかも茨城女子戦車連隊連隊長車にあと一歩のところまで迫ったのである。（まさにエリート）
伊隅「いえ、あれは部下たちが戦車隊の相手をしてくれたからですよ。」
沖田「それでもです！」

武ｓａｉｄｏ
武「なんなんだよ、あれ。強すぎる」
武たち第２０７中隊はこれまでにないほど落ち込んでいた。自信をもって立てた作戦をことごとく見破られ、各員何機かは撃破か損傷ありの判定にしたもののその代わり自分たちは壊滅しヴァルキリーズの隊長である伊隅大尉以外は茨城女子戦車連隊にすらちかずけな

かったのであるから。
榊　千鶴「まさかあんなに一方的な戦闘になるなんてね。」
冥夜「しかし、あの連携と即時判断する能力は恐ろしいな。」
珠瀬　壬姫「あ、まりも隊長が帰ってきました！」
神宮司「皆、大丈夫か？」
武「隊長！なんなんですか!?あの自衛隊の戦闘能力は！ＢＥＴＡとの戦いで彼らはほとんど戦ってないんでしょう!?」
神宮司「ああ、それは間違いない。それについて聞いてみたところ、『一部の帝国軍と近衛軍のせいで戦果が奪われていたが実戦経験がある部隊は多い』と言われた。」
冥夜「そんな馬鹿な・・」
神宮司「あと、伊隅大尉から『こんなに無様な醜態をさらすとは情けない！今後しばらくビシバシとしごいてやる!!』と言われた。」
全員「「「「「えええー――!?」」」」」

第六話　１２．５事件前日の自衛隊の行動

１２月４日

琥珀「本部長！大変です～!!」

沖田「なんですか、琥珀さん、それに翡翠さん？騒がしいですよ穏やかな日に」

翡翠「緊急事態です！帝都守備連隊の一部と帝国軍所属の富士教導団がクーデターを起こそうとしているようです!!」

沖田「え、はぁ!?ま、待ちなさい！決起!?なぜ!?」

琥珀「なんでも将軍が政府にないがしろにされ見下されていることや数日前の火山噴火に対する災害派遣についてのプロパガンダに対する不満がたまり切った影響のようです。」

沖田「ああ、わが自衛隊の災害派遣部隊を派遣しようとしたら政府が拒否した挙句拉致同然に無理やり現地住民を避難させた件ですか。まあ気持ちは分からないでもないですがねぇ。」

翡翠「どうもたきつけたのはＣＩＡの工作諜報員らしいのです。」

沖田「また米帝ですか。その決起部隊の指揮官は？」

琥珀「狭霧　尚哉大尉です」

沖田「あの愛国者にしてエースをたきつけやがりましたか！米帝は!!」

翡翠「とにかく！このままでは明日にでも部隊は決起してしまいます！そうなれば・・」

沖田「我が物顔で大手を振って米軍と国連軍が政府を操れるというわけですか・・」

琥珀「どうしますか？」

沖田「どうしたもこうしたもありません!!中部方面隊と東部方面隊に緊急連絡！東部方面隊の帝都駐留中の部隊は!?」

琥珀「はっはい！島田愛里寿さん指揮下の選抜女子戦車連隊が！」

沖田「直ちに近隣の部隊と合流し臨戦態勢を！なんとしても駐屯地と空自基地は死守しなさい！あと横須賀港の第一護衛隊群の全艦隊

に東京湾全域に臨戦態勢で展開！絶対に米第七艦隊を横須賀に入れるな!!」
琥珀・翡翠「「りょっ了解!!」」

中部方面隊司令部　岐阜駐屯地本部（実際には兵庫らしいですがＢＥＴＡに制圧されたので岐阜まで後退したという設定です。）
モードレッド一等陸佐「アルトリア陸将補!!緊急連絡だぜ!!」
アルトリア「あのですね、もう少し礼儀を・・まあいいですか。それで連絡は？」
モードレッド「電報で直接渡せって」
アルトリア「はあ？って統合作戦本部長から？。どれどれ・・・・は？」
モードレッド「り、陸将補？どうかｓ「モードレッド一等陸佐!!」はっはい！」
アルトリア「ただちに帝都近郊の部隊に第一種臨戦態勢を！防衛出動待機状態と心得なさい!!」
モードレッド「ええ!?な、なんで「これを見なさい！」こっこれは・・わかった！すぐに連絡する!!」
タタタ・・・・・
アルトリア「米帝め!!」

東部方面隊司令部　朝霞駐屯地
織田一等陸佐「長尾陸将補!!昼間から酒飲んどる場合ではないぞ！統合作戦本部長から緊急の電報じゃ!!」
長尾「ほえ？どれどれ・・・って！織田一等陸佐！今すぐ島田選抜女子戦車連隊に第一種臨戦態勢をとらせなさい!!各空自の基地にも警備隊に臨戦態勢！海自の第一護衛隊群に東京湾と九十九里浜、相摸湾を封鎖させなさい!!米帝の第七艦隊を近づけさせないで!!」
織田「ふむ？その内容だとかなりまずいのじゃな！わかった！すぐに伝える!!じゃが厚木の帝国軍基地にあるＡｎ２２５ムリヤはどうするのじゃ？」

長尾「あんなデカ物移動させるだけで目立つから論外です!!放置なさい！その代わり小松基地にある帝国軍から払い下げられた戦術機Ｆ―１５Ｅを改造して編成した自衛隊初の戦術機部隊は必ず使う時がありますから死守しなさい!!米軍だろうが国連軍だろうが供出を拒否!!強硬策に出てきたら射殺を許可します!!」

織田「はっはっは!!面白い!!わかったぞ!!」

島田選抜女子戦車連隊連隊本部　帝都駐屯地

アズミ「隊長！緊急連絡です！」

愛里寿「なに？・・・各員に第一種臨戦態勢を。急げ!!」

バミューダ三姉妹「「了解!!!」」

愛里寿「はあ、本部長も無茶をおっしゃられるなぁ」

こうして自衛隊の各部隊は１２．５事件に対応すべく素早く動いていった。

第七話　１２．５事件勃発！米軍・国連軍との認識の違い

１２月５日

ついに帝国軍帝都守備連隊が決起した。これにより政府首脳陣のほとんどは決起部隊に拘束されたが一部の政治家が仙台の陸上自衛隊駐屯地に強引に押し入り、仙台臨時政府を樹立した。これに当の駐屯地司令は我が物顔で臨時政府を駐屯地で樹立した政治家の馬鹿さ加減に怒りが収まらず銃殺命令を出しかけたが統合作戦本部長からの監視及び、万が一の場合国家反逆者の処理は任せます、との連絡がきたので何とか抑えた。

狭霧『・・テレビやラジオの電源は必ずつけておいてください。また急患の方は・・・』

沖田「まったく。おそらく狭霧大尉は部下に反逆の首謀者という汚名を着せたくないから自分がリーダーとなってコントロールしようとしたのでしょうね。」

琥珀「なんか、かわいそうですねぇ。」ハアァ

翡翠「まあ各駐屯地は仙台駐屯地以外はおおむね計画通り死守に成功とのことです。ただ臨時政府から東京湾をあけろと催促が。」

沖田「まったくやはりこの日本を売る算段でしたか、仙台駐屯地にＭＰを政治家の周りに、武装して、待機させなさい。いつでも拘束できるように。海自にも絶対に屈しないようにと。」

琥珀「もちのろんですよ！ただ、海自の第一護衛隊群の戦意が半端じゃなくてこちらから撃ちかねないとの報告も。」

沖田「いや、それだけはやめさせて」

ヨコハマ国連軍基地管制室

珠瀬　玄丞斎「ですから、ネモ海将どの第一護衛隊群の艦艇を全艦撤収していただきたい！米第七艦隊が入れないのです！」

ネモ「う～ん。そういわれてもねぇ、ぼくたちのほうには米艦隊は

あくまで演習のために日本沿岸に展開しているとしかきいてないし僕たちは帝都での一部部隊の決起を受けて海外から決起部隊の援軍が万が一きた場合に備えているだけだよ？そもそも僕じゃあなくて統合作戦本部長に言ってよ、僕責任取れないよ。」

珠瀬　玄丞斎「ぐぬぬ。」

ここ横浜の国連軍基地では米艦隊を入れたい政府側と正式な手続きが完了するまで入れたくない国連軍現場、そして事前の通告もなしに日本の港に武装して入ってくる艦隊を『侵略者』としか見れない海上自衛隊の首脳陣が互いに譲歩を引き出そうと交渉していた。

パウル・ラダビノッド「ネモ海将どの。一度統合作戦本部長に連絡を取っていただけないでしょうか？このままでは時間だけが過ぎていき国連安保理での議決がそのうち出るでしょう。そうなれば護衛艦隊が沈められるかもしれません。」

ネモ「ねえ。それは脅しかな？ここヨコハマに反発感情のある隊員も海自は少なくないの。だから米艦隊が撃ってきたらここヨコハマも火の海になりかねないよ？」

パウル・ラダビノッド「そ、それは。」

ネモ「分かったよ。ぼくも部下は死なせたくないからね。あぁ統合作戦本部長？」

沖田『何ですか？』

ネモ「政府のお役人が僕に艦隊をどけろって脅してきてるんだけど」

沖田『国連軍は？』

ネモ「安保理の議決を待ってからって言ってるけどまあ賛成みたい。」

沖田『わかりました、艦隊を開けさせなさい。ただし安保理から統合作戦本部に連絡が来てからですし上陸する部隊を乗せた輸送艦以外は入港拒否！その部隊はおそらく２０７、つまりヴァルキリーズとともに行動するでしょうから９８式『ラーダー』の監視付きという条件で』

ネモ「分かったよ～。」

こうして米陸軍第６６戦術機動大隊を乗せた輸送艦のみ入港を許可された。しかし、監視の部隊を付けたうえ万が一の場合はその連合部隊の管制は航空自衛隊の中空ＳＯＣが行うこととなった。

第八話　航空自衛隊の虎の子！航空戦術実験飛行隊出撃！

ヴィーヴィー!!

宮藤芳佳「なっ！スクランブル!!??」

ここは航空自衛隊小松基地。ここには航空自衛隊虎の子部隊が駐留している。

帝国軍から払い下げられた戦術機Ｆ－１５Ｊ（陽炎）を改造・改修し、強化した機体である、

Ｆ―１５Ｊ改＋を２５機も装備した『航空戦術実験飛行隊』である。

（このＦ―１５Ｊ改＋は

劇場版パトレイバー２に出てくる、Ｆ―１５イーグル＋を戦術機化したものだと考えてください）

このＦ―１５Ｊ改＋と帝国軍のＦ―１５Ｊの違いは、まず標準武装として９９式ヘルダイバーが標準装備としている、４０ミリ機関砲を右腕に装備！そして対戦術機用の強力な武装として『０４式空対空誘導弾』を肩部の専用の発射機に装備している。一応近接用の大型刀も装備はしているが近接戦は最後の手段と考えている自衛隊内ではあまり好まれない。（ちなみに機体色は陸上自衛隊の濃緑色がメインです）

宮藤「いや、このサイレンは・・作戦室に集合！」

そうして宮藤を筆頭とする航空戦術実験飛行隊のメンバーは作戦室に集合した。そして飛行隊隊長の坂本美緒が作戦参謀にしてバディのミーナ・Ｄ・ヴィルケとともに入ってきた。

坂本「総員！集まってもらったのはほかでもない。緊急事態だ!!」

服部「隊長！また近衛が衛士をよこせと言ってきたのでしょうか!?」

坂本「まあ確かにそれもあったがそれは３日前だ！今緊急事態なのは帝都守備連隊がこともあろうに決起した！」

全員「「「「「えーーー！」」」」」

はやぶさ「坂本隊長殿。統合作戦本部から何か通達があったのでしょうか？」
坂本「相変わらずお前は落ち着いているな・・？そうだ！我々航空戦術実験飛行隊は全員出撃！Ｆ―１５Ｊ改＋はもとよりＦ―４ＥＪ改やＲＦ―４ＥＪ改もだ！我々の任務は在日国連部隊と米陸軍第６６戦術機動大隊の監視及び万が一の場合その部隊の殲滅!!一応中空ＳＯＣの指揮下にあるとのことだがそもそもこの決起騒動がアメリカＣＩＡの工作の可能性が高い上に米軍も国連部隊も信用ならないからな!!」
シャーロット・Ｅ・イエーガー「えー！そんなにあたしの出身国が信用できないのかよ！」
（ちなみにこの部隊は日本で孤児、もしくは難民となっていた者が多い）
バルクホルン「大丈夫だ。お前は隠し事苦手だろ？」
シャーロット「おう!!」
バルクホルン「自信満々で言うな！」
坂本「まあそこはいつも道理か・・まあいい！各員出撃!!我々が自衛隊の虎の子部隊と言われる由縁を教えてやれ!!」
全員『応!!』

そのころ横浜国連軍基地から出撃した２０７部隊・ヴァルキリーズ・第１９独立警護小隊
だったが
武ｓａｉｄｏ
神宮司「どういうことですか！」
中空ＳＯＣ管制官「何度も言わせるな！決起部隊と接触しても相手を追い払うための威嚇射撃以外は認められない！もし交戦を回避できないなら申告しろ!!」
（自衛隊との交渉で自衛隊の中空ＳＯＣの管制下に入ることが絶対条件だったらしいが発砲すら満足に許されないなんて！）
中空ＳＯＣ管制官「そもそもお前らは塔ヶ島城離跡で待機のはずだ

!!今回の決起騒動は日本国の内政問題!!予算食いつぶすしか能のないお前らがこれ以上資材まで無駄に消費する気か??!!」
（それにさっきから中空ＳＯＣの管制官が俺たちの戦闘能力まで縛ろうとしてくる！）
冥夜「ふざけるな！身を守るための発砲すら許されないのか！」
中空ＳＯＣ管制官「訓練生がいっちょ前な口をきくんじゃない！そもそもこの一大事に外国所属の部隊が二つも行動できているだけでもありがたいと思わんか!!」

そう、実は沖田統合作戦本部長が中空ＳＯＣの管制下に彼らを置かせたのは中空ＳＯＣの管制官のほとんどは反米感情や反国連感情の強いものが多く、彼らのことをよく思っていない者が多いことを教えるとともに『もしも勝手に動こうものなら命令違反者として処理してやる！』という自衛隊の意思を示すためでもあったのだ！（ちなみに琥珀一等陸佐と翡翠一等陸佐の入れ知恵もあったとか）
中空ＳＯＣ管制官「とにかく!!何かあったらすぐに報告しろ！万が一勝手な行動をとった場合即座に命令違反者として処罰する!!わかったな!!」
（くそ！なんなんだよ!!）

統合作戦本部
参謀１「米軍の第６６戦術機動大隊が中空ＳＯＣの指示は聞かないと言って勝手に帝都方面に向かっています！」
沖田「やはりヤンキー共は約束を守りませんか（＃　。Д。）！。」
参謀２「大変です!!帝都城近郊で決起部隊と近衛軍の一部部隊とが交戦を！」
沖田「今すぐに中央即応連隊と第一戦車大隊を双方の真ん中に！やり方は任せます、とにかく落ち着かせなさい!!っくＣＩＡめ、どこまで入り込んでいるのやら。」
統合作戦本部長の沖田桜は頭を抱えていた。何せこちらが譲歩して入港を許可した第６６戦術機動大隊が中空ＳＯＣの指示に『我々に

は関係ない』と言い放った挙句通信を遮断してしまったのである！さらに臨時政府から『アメリカ軍に干渉をあまりするな』と遠回しに言われたため怒った沖田は東部方面隊の長尾陸将補に航空戦術実験飛行隊の出撃命令と仙台駐屯地の臨時政府の主要メンバーを直ちに国家反逆罪で拘束させ尋問部隊に任せた。

翡翠「一応、工作員と思しきものは大方押さえたと思っていたのですが・・・。」

沖田「まあ今更嘆いても意味がありません！アルトリア陸将補！長尾陸将補！そちらは？」

アルトリア『はい、工作員は全員銃殺命令を出しました！そして国連部隊がこちらの方面に来ているので第十五即応連隊に遠回しに監視させてます。」

長尾『こちらはヨコハマを手の空いている部隊で完全に包囲させました。蟻一匹入れません！』

沖田「よし、でｈ「たったいいへんです～！」って琥珀一等陸佐？」

琥珀「大変です!!２０７部隊とヴァルキリーズが塔ヶ島城離跡で将軍殿下を保護したと!!」

沖田・アルトリア・長尾『『「はあ??!!」』』

第九話　自衛隊初の防衛出動命令発令!!

沖田「まっ!待ちなさい!!なんで将軍殿下が塔ヶ島城離跡なんかに!!」

琥珀「なんでも情報省の手引きで帝都を脱出していたとのことで。」

こんな重要なことをまったく連絡しなかったことは大問題である。そもそも自衛隊は国連部隊が塔ヶ島城離跡での待機を認めたのはそこに何もないという事実があったからである。

沖田「すぐにヴァルキリーズ隊長伊隅大尉に通信を!!」

琥珀「そっそれが、『殿下を横須賀にお連れしたほうが安全である!』と判断した２０７部隊が中空ＳＯＣの指示を無視して後退を始めてしまいまして・・」

沖田「いや!まず報告して上の判断を仰いでからでしょう!こんな政治的な問題を現場部隊だけで判断するんじゃない!!（＃　。Д。）。」

沖田陸将の怒りはもっともである、戦場で戦術的な独断なら状況次第なら褒められるが政治的な大問題につながりかねないこの状況での独断は許されるものではない!

参謀１「米軍部隊が国連部隊と合流しようとしていると航空戦術実験飛行隊と中央戦闘ヘリ部隊の第一戦闘ヘリ部隊のグレイゴースト０１から報告が!」

参謀２「米軍部隊のメンバー表を確認したところ、ＣＩＡ工作員らしき人物が!そしてその工作員によって一人の女性隊員の対Ｇスーツに工作されているとの未確認情報が!!」

沖田「もういいです・・天皇陛下に防衛出動命令の布告の請願を!!もう国連軍や米軍はもとより、帝国軍と近衛軍には我慢の限界です!!」

全員「「「「『了解!!!』」」」」

そうして日本帝国の眠れる守護神が目を覚まし、理由を手にした。

宮中

公家１「陛下、沖田家の長女より緊急連絡とのことです。」

天皇「ふむ?この事態についてだろうな。まわせ。」
公家２「はっ。」
沖田『陛下、ならびに公家の各家の皆様、この時間に申し訳ございません。』
陛下「よい。で、何か?」
沖田『防衛出動命令，を布告していただきたいのです!』
公家全員「「なっ!!??」」
公家１「そっそれは大丈夫なのかね?自衛隊の戦力が米軍に対抗できるのか?」
沖田『大丈夫です。それに証拠もおおよそは確保済みです。』
天皇「分かった。私の権限をもって防衛出動命令をだす。」
公家全員・沖田「「『はっ!!』」」
こうして正式に、かつ初めて防衛出動命令が発せられた。
武ｓａｉｄｏ
中空ＳＯＣ管制官『２０７部隊!!米軍部隊!!直ちに戦闘行為を停止せよ!!』
(さっきからずっと自衛隊の管制官がうるさいがこっちは殿下を護送してんだぞ!交戦を避けられるわけないだろうが!!)
アルフレッド・ウォーケン少佐『そんな命令は聞けない』
(ただウォーケン少佐の言葉がすこし足りないような)
中空ＳＯＣ管制官『なに・・・ふん。そうか』
(なんだ?)
中空ＳＯＣ管制官『この通信を聞いている自衛隊全部隊!!天皇陛下より，防衛出動命令，が発令された!!米軍部隊と国連軍を侵略軍とみなし彼らに［拉致］された将軍殿下を救出せよ!!』
(なっなに!!??)
中空ＳＯＣ管制官『ウォーケン少佐、この茶番の付けは払ってもらうぞ!ＣＩＡの工作員の手先が!』ブチッ
(なっ!)

第十話　狭霧部隊投降・イルマ・テスレフ少尉確保！

沖田「なんですって？煌武院　悠陽殿下が命令の撤回を申し入れている？」

琥珀「はい、一応『統合作戦本部で確認するので』と言って時間を稼がせましたが・・。」

沖田「まったく、あのお方は心優しい上に自分の立場の利用方法をよく理解しておられるからなぁ」メンドクサイ・・

そう、なんと煌武院　悠陽殿下が防衛出動命令を撤回するように申し入れてきたのだ、とはいえ征夷大将軍が天皇陛下の命令に異議を唱えるのは論外だが、一応国事全般を天皇が預けているので対処に困るのである。

沖田「まったく、しかたありません。国連部隊への攻撃は一時停止。しかし監視は継続！あのヤンキー共が好き勝手しないようにしなさい!!」

武ｓａｉｄｏ

中空ＳＯＣ管制官『というわけだそうだよ#。』

（よかった、何とか説得は通じたようだな）

中空ＳＯＣ『とはいえ殿下。』

煌武院「はい。」

中空ＳＯＣ管制官『このような状況になったのはいくら情報が錯綜していたとはいえ帝都を脱出されていたことを連絡していなかったあなたにも多少の責はあることを理解してくださいよ。』

煌武院「はい、わかっております」

（やれやれだ）

そのころの東部方面隊司令部

長尾「なんですって！厚木基地の帝国軍６７１航空輸送隊が!?」

織田「ああ、よく考えたものじゃ！まさか戦術機［不知火］で空挺作戦を行おうとは。さすがは狭霧大尉といったところかの？」

長尾「感心している場合ですか！」

東部方面隊も計算外であった、まさかＡｎ２２５ムリヤで空挺作戦

を行うなどとは。
長尾「直ちに航空戦術実験飛行隊に緊急連絡！それと習志野の第一空挺団に緊急出動命令！逆空挺作戦を行わせなさい!!」
そう、陸上自衛隊最強の部隊。第一空挺団に緊急出動を命じたのだ、即断即決とはまさにこのことだ。
織田「うっうむ。了解した！しかし間に合うかはかけじゃぞ？」
長尾「それでもです！」
［ＡＨ―８８Ｊ２改グレイゴースト］
パイロット１「まったくもう。彼奴らは本当に好き勝手やってくれるな　」
このＡＨ―８８Ｊ２改グレイゴーストは最新鋭ステルス化システムの［灰色幽霊］を稼働させ、完全ステルスモードとなっていた。そのおかげで米陸軍第６６戦術機動大隊と２０７部隊に気ずかれずに立川駐屯地からつけていたのだ。
パイロット２「まあ、そのおかげでアメリカ軍の行いやＦ―２２Ａの戦闘記録を記録できたし航空戦術実験飛行隊に映像を転送できてるだろ。」
パイロット１「そうだけどよお」
いくら統合作戦本部からの命令でも立川駐屯地からずっと身勝手な米軍の行いを妨害すらできずに見つからないように監視せよとは酷な話である。
パイロット２「ん？おい見ろよ、煌武院　悠陽殿下のお顔が見れるぞって！おい！訓練生と顔がうり二つじゃねーか!!」
パイロット１「なんだとー!!」
（ちなみに自衛隊で煌武院　悠陽殿下と冥夜訓練生の関係を知っているのは一部の幹部だけだったがこの映像で一般の隊員にもばれた）
パイロット２「何々？訓練生と殿下を取り換えて時間を稼いでいるうちに殿下は避難するってまあ考えとしては間違っちゃいないがまた報連相をわすれてやがる・・・」
この時点で狭霧大尉配下の戦術機部隊は米軍と国連軍部隊を空挺効果で包囲し交渉中だったがその情報すら統合作戦本部はおろか東

部方面隊司令部にすら国連部隊と米軍は伝えていないのである。
パイロット1「まずいぞ。もしこの時間稼ぎの最中に米軍機が発砲でもしたら・・」
パイロット2「航空戦術実験飛行隊に緊急連絡！統合作戦本部と東部方面隊にもだ！」
パイロット1「お、おう!!」
統合作戦本部
沖田「やはりですか。」
琥珀「米軍が描いた絶好のタイミング。ですが、」
沖田「ええ、この状況を利用します！そのグレイゴーストに発砲しようとする米軍機を見つけ出させなさい！処理は航空戦術実験飛行隊に任せます!!」
琥珀「はい!!」
［ＡＨ―８８Ｊ２改グレイゴースト］
パイロット2「と言われてもなぁ。」
パイロット1「ぼやくなよ。早く見つけねえとこの国の将来が！」
実は命令が来た時にはすでに狭霧部隊と煌武院　悠陽殿下に成りすました冥夜訓練生が交渉中であった。
パイロット1「ん!?オイ、あのフィンランド人の女性隊員が乗ってるラプターの様子が怪しいぞ！」
パイロット2「なんだと！まずいＣＩＡの連中、彼女に撃たせて混乱状態の中で彼女も始末する気か!!」
パイロット1「おい、どうする！」
パイロット2「やるしかないだろ!!ヘルファイヤミサイル発射!!」
そうして急遽完全ステルスモードを解除したグレイゴーストが発射したヘルファイヤ対戦車ミサイルによってイルマ・テスレフ少尉が乗ったラプターは損傷を受け発砲を阻止できた。
航空戦術実験飛行隊
グレイゴースト『こちらグレイゴースト！米軍機が発砲しようとしたためミサイル攻撃を行った！申し訳ない!!』
坂本「いや、よくやった！こちらも今到着した!!」

グレイゴースト『よかった!!』
武ｓａｉｄｏ
冥夜「では狭霧ｔ
ドガァアアン
（な、なんだ!）
突然ラプターうちの一機が爆発し頭上を見たこともないヘリが通って行ったらまあ混乱するだろう、そしてさらに混乱する事態が起きた
坂本《あー・あー。聞こえるか!狭霧大尉の部隊!そして卑怯にもだまし討ちをしようとしていた国連部隊と殿下と狭霧大尉をまとめて始末しようとしていた米軍部隊とＣＩＡ工作員!!こちらは航空自衛隊所属の航空戦術実験飛行隊だ!!すでに貴様らは完全に包囲されている!!これ以上の抵抗は死を招くのみである!武器を下ろし速やかに投降せよ!》
（い、いつの間に!）
こうしてこの通信ののちに航空戦術実験飛行隊の部隊が突入し、狭霧大尉の部隊と国連部隊を瞬く間に拘束していき、抵抗した一部の米軍機をＦ―１５を改造したＦ―１５Ｊ改＋で殲滅して本物の殿下の確保に成功した。

第十一話　自衛隊治安出動！・米国政府大パニック!!

狭霧部隊とウォーケン少佐の第６６戦術機動大隊を航空自衛隊の航空戦術実験飛行隊が捕縛し、第一空挺団が将軍殿下を保護したのちに国連の艦隊に２０７部隊とともに殿下を預けた。そして将軍殿下が横浜国連軍基地につき、国連部隊に感謝の意を示しているその時に突然の放送が始まった。

ピンポン・ピンポン♪

『帝都及び近県の視聴者の皆様にこれから緊急放送をお送りします。テレビ及びラジオの近くにいる方はできるだけ多くの方に声をかけ、放送をお聞きになるようにご協力をお願いします。』

「なっなんだ!?」

まあ横浜基地の港湾地区で将軍殿下に謁見中の武たちにはまさに‘寝耳に水’状態である。

『先ほど沖田桜統合作戦本部長は緊急記者会見を行い、首都圏の治安を維持し予測される最悪の事態に備えるため自衛隊内の最も練度が高い部隊に出動を命令したと発表しました。』

「な、なんだと!?」

近衛軍の月読中尉達もこの状況は完全に予想外であったようである。

『今回の命令について翡翠一等陸佐は‘今回の１２．５事件を精査した結果、米国ＣＩＡの裏工作の可能性が非常に高く、国連軍の一部の部隊も関与していた可能性があり証拠として決起部隊と米陸軍第６６戦術機動大隊の中にＣＩＡの工作員数名とその機動大隊の隊員であるイルマ・テスレフ少尉に指向性蛋白という洗脳薬のようなものがその工作員と米国政府に投与されていた事実が明らかになっておりこの決起を引き起こし日本への影響力を復活させたい米国政府の一部政治家と国連のオルタネイティブ５推進派が共謀したことが明らかとなった’と発表し、今回の命令は国連部隊やアメリカ軍、そして工作員をやすやすと見逃す帝国軍と近衛軍は予想される最悪の事態に対応できないだろうという判断にもとずくものであり・・』

「な・・・!?」
　神宮司少佐やその他の武を含む２０７部隊、伊隅戦乙女隊の面々はまだ事態についていけていない。
『この決定により現在各地に配備が進んでいる部隊は、陸上自衛隊東部方面隊第一師団第一普通科連隊・同第三十一普通科連隊・同三十二普通科連隊・同三十四普通科連隊・同第一特科連隊・同第一戦車大隊・中央即応連隊・千葉女子戦車連隊・富士教導団特科教導団・同戦車教導隊・同普通科教導隊・同レイバー教導隊・中部方面隊第第十四旅団第十五即応連隊。また現在帝都に駐留中の部隊はそのまま・・』
　つまり帝都はおろか関東域一帯が自衛隊の管轄エリアになったわけである。これは自衛隊の『帝国軍と近衛軍は無論のこと国連軍であっても好き勝手な行動は許さん!（＃　。　Д。）』という意思の表れでもあった。
「ど、どうすれば。」
「ちょっと!どういう事!?」
　これにはさすがの煌武院殿下や香月博士も想定外であった。
　米国議会
「どういうことだ!」
「自衛隊から完全に見限られたということですぞ!どう責任をとるおつもりか!!」
　ここ、アメリカ議会は現在混乱のただなかにあった。なにせ今回の件でアメリカの悪行が世界に周知されたばかりか非人道的な薬物を本人にすら知らせずにしかも非アメリカ人にのみ投与したことで野党議員たちからのつるし上げに大統領と与党議員たちはあっていたのである。
「よくもやってくれましたな!これでこれまで極秘裏に進めてきた自衛隊との技術交流の話も完全に水にながれ、我々の努力と苦労も水の泡となったのですぞ!!」
　実は一部の良識ある軍人や議員たちは自衛隊の対米感情を和らげようと努力をつづけてきてこの１２．５事件が起きなければ自衛隊が開発した「灰色幽霊システム」とラプターの技術の交換で対米感情

が和らぐ一歩手前だったのである。
（ちなみにウォーケン少佐や工作員に薬物投与を受けなかった米軍兵士たちは帰国を許され、沖田統合作戦本部長の計らいで，彼らは命令を実行しただけであり、罪の追求をせず責任を押し付けないように，との手紙がアメリカ議会と国連議会に送られたため彼らは罪の追求は受けなかった。）
　そもそも与党内部でもこの作戦には反対の者が多く大統領への不信感が高まったところでこの事態である大統領と一部与党議員たちは仲間からも見放され始めた。

　現在アメリカ国民にも先ほどの放送が英語に翻訳された状態で放送され、大規模デモが発生し大統領弾劾裁判が開催されようとしていた。

第十二話　ヨコハマ包囲

沖田統合作戦本部長の指示により戒厳令下に近い状況になった関東一帯。そしてヨコハマにも自衛隊の制圧部隊が急行していた。
「こちら東部方面隊第一師団第一普通科連隊、現在ヨコハマ包囲中の部隊との合流しました。オクレ」
『ＨＱ了解。特殊作戦群の到着まで相手の気を引き付けるようにとのこと、オクレ」
「普通科第一連隊了解、通信オワリ」
ここは国連軍ヨコハマ基地の前にある市街地跡地。ここに陸上自衛隊東部方面隊所属の普通科連隊４個連隊とレイバー５個中隊、そして機甲科１個大隊が展開しヨコハマ制圧作戦の実行命令を待っていた。
「つたく。将軍殿下にも困ったものだ、近衛に守られていたんだから帝都城に残っていればこんな面倒なことにならなかったのによ」
「まあそれを我々が言っても仕方ありませんよ連隊長、それに情報省や米帝の工作もあったそうですしまだ天皇陛下よりも幼く経験も少ない殿下にそれは酷ってもんです。」
「いやしかしな副隊長、沖田統合作戦本部長より２～３歳違うだけだぞ。それに本部長は市ヶ谷の本部にずっと残って指揮をしておられたのに・・」
そう。１２．５事件の際、自衛隊総司令官の沖田は市ヶ谷にある総司令部から動かず部下を信頼し事態の鎮静化に動いていたため天皇陛下からは多少の叱責を受けたが部下たちからは感動されていた。
「しっかし国連のやつらの懐についにメスを入れられるな」
「まったくです。しかし近衛の連中の件はどうしましょう?」
「まあそっちのほうは方面隊司令が何とか黙らせるそうだ。というか近衛ももういらないという世論が一部にあるからな」
この世界における近衛は一部の優秀な者を除いてほとんど戦線に出たくない武家の子息が集中しておりおまけに自衛隊を人材を引き抜くためだけにあると誤解している節があり自衛隊からの印象は最

悪の一言である。（しかし一部の優秀な者が自衛隊に亡命感覚で入隊を希望してくるので自衛隊としても悩ましい評価となっている）
「さすが長尾陸将補。いやーいつも酒飲んでるのでただの飲んだくれだと思ってました。」アハハ
「ほう？だーれが飲んだくれですってぇ？」（#^ ω^ ）
「「ゲェ!!なっ長尾陸将補!!」」
「まあ聞かなっかったことにしといてあげます。ただしこれからは周囲に気を配るように」
「あ、ありがとうございます。ところでなぜここに？」
「ああ、通信は傍受される危険があるのと自分の目で実際に確認したかったのですよ。あと・・・」
「「あと？」」
「アメリカ、今かなりやばいそうですよ」
「「ええ!?」」
　そう、１２．５事件の後に全世界に向けて自衛隊が流した証拠映像や証言によってアメリカ大統領は退陣。そして作戦を立案し謀略を働いたオルタネイティブ５推進派は国連から総スカンを食らいオルタネイティブ５の内容変更を各国から求められオルタネイティブ６を自衛隊やソ連、ＮＡＴＯなどと協力して立案することとなったのである。（とはいえ４は失敗してないのでまだ検討中である）
「なんでも親日派とアメリカ至上主義派との内乱に発展しそうな勢いって話です。とはいえ後方の大工業力国家が崩壊するのは各国避けたいので国連は何とかしようと躍起になってるそうです」
「「うわぁ・・」」
「つま。因果応報ってわけですね。横浜のほうも第一護衛隊群のおおすみ型からＡＡＶ７が出撃して上陸する予定ですから安心してください。はぁ、できれば帝国軍の海神が欲しいのですがねぇ」
　ヨコハマｓｉｄｅ
　ヨコハマ側はパニック状態に陥っていた。
「もう降伏し自衛隊の部隊を入れるべきだろう！」
「しかし伊隅大尉！ここは国連の管轄ですよ！」

「だからこそだ！こんな世界情勢で自衛隊に抵抗したらここの復興すら許されんのかもしれんのだぞ！それに見られても問題のないはずだろうが!!」
（くそ！どうしてこうなったんだよ）

第十三話　後処理

ヨコハマ包囲が完了し後、強行突入を行おうとしていた自衛隊上層部にとってまたもや面倒なトラブルが生じた。将軍殿下による現場部隊への説得があったからだ。

例え天皇陛下の大権ほどの権限は有してはいないと言っても天皇陛下から大権を与えられている現状、彼女の意見を無下にするのは天皇陛下をないがしろにしていると同じ。

そのため沖田は陛下に現状の報告を行いご聖断を仰いだ所…

「すでに事は収束していると朕は思う。なれば国の体制を立て直し、国民の生活の安定と戦線の維持に努めるべきであろう」

との判断を受けたために強行突破は中止となり、首都圏一帯に展開していた自衛隊部隊は各駐屯地に撤収。

戒厳令は解除される運びとなった。

（なぉ。先陣切って突入する気満々だった長尾陸将は地団太を踏んだという）

そして国家の立て直しが図られた。

戦後からこれまで天皇が将軍に与えていた政治主導権を奪って好き勝手していた議会から決定権と発言権を将軍に戻し、天皇家にも発言権を戻した。さらに議会もこの１２．５事件後に行われた調査で米・ソ・欧州系の工作員にたぶらかされた議員が多かったためにそういった政治家は全員が自衛隊により身柄を拘束されて尋問部隊によって徹底的に痛めつけられたのちに銃殺刑に処され、工作員は凌遅刑となった。

軍にも捜査の手が入り、近衛軍・本土防衛軍・帝国軍の一部要員が拘束された。

そうして政治体制や軍の正常化を行ったのだが、問題になった物が幾つかある。

国連軍と米軍、そして狭霧大尉以下決起部隊の始末だ。

狭霧大尉以下決起部隊の決起理由を問いただした結果、国を憂いて

立ったことは明白であったが、決起は決起。反乱部隊と見なされてもおかしくないのだ。
しかし沖田統合作戦本部長は彼らの国を思う志と衛士としての錬度を失うのは惜しいとし、投降した者は狭霧大尉以下全員を自衛隊預かりとしたのだ。
これにアルトリア陸将補は「動乱を起こした者らにはしっかりとしたけじめをつけるべきです！」と反対の意向を示したのたが、自衛隊における戦術機の配備数の少なさやＢＥＴＡとの戦いで必要な衛士をむやみに減らすべきではないということには同意していたのと、彼らが搭乗していた不知火も自衛隊預かりとなると聞いて渋々承諾した。
次に厄介なのは米軍だ。ウォーケン少佐以下の部隊は即刻強制帰国させたが、未だ一部部隊は本土に残っており、始末に困る有り様だった。止む終えないので一時的に捕虜扱いとして近隣の自衛隊駐屯地のＭＰに拘束させ、米国政府との交渉で決めるとなった。
最後の厄介事はヨコハマの国連軍だ。オルタネイティヴ４の直轄地なので下手に手を出すと国連軍が本格介入してくる可能性があるのと、将軍殿下と直属の近衛が残っておりその返還交渉もしなければならないためにさすがの沖田も頭を抱えていた。
それに香月博士の進めるオルタネイティブ４の詳細も不明なために下手に手を出すと面倒な事態になりかねないのだ。
とはいえ国連側としてもオルタネイティブ４の詳細は知りたかったようで自衛隊との協議の結果、近いうちにヨコハマ基地への自衛隊部隊による査察を行うこととなり、実行部隊として統合作戦本部直属のＭＰとＭＰ所属のパトロールレイバー中隊、『パトレイバー隊』を投入することとなった。
このため佐渡島への攻撃計画は先延ばしにされ、自衛隊もＭＰレイバー隊用に開発し正式採用されたが、量産計画途中で放棄されていた零式の増産を検討することとなった。
（ちなみに１２．５事件の際にパトレイバー隊は市ヶ谷駐屯地防衛の任についていたので発砲の機会がなく第二小隊二番機パイロットの

ストレスが溜まっているとかなんとか…）

トータルイクリプス編

前日談一話　近衛京都訓練校と自衛隊との交流会

「まったく。この近衛との関係はどうにかならないんですかね？」
「恐らく無理かと」
「いや、そんなあっさりと・・・まあ否定できませんが」
　ここは自衛隊桂駐屯地。ここでは自衛隊京都防衛隊や試験隊が駐留しているがここには現在場違いな来訪者がいた。沖田桜統合作戦本部長と数日前に中部方面隊司令となったアルトリア陸将補である。
「しっかし、近衛の訓練校・・『お嬢様校』の近衛子女とのトラブル・・まあ市民が多いようだがなんてことだ・・これでは平民主体の自衛隊との連携の見込みなど・・・・。」
「こうなったら・・交流会しか・・ないですかね？」
「「「はぁ!?」」」
「え？なにか問題が??」
「いや、姉さん!!無茶ですよ!!ただでさえ関係が悪いのに！」
　これにはさすがにアルトリアや彼女の部下達もパニックになった。そりゃそうである、ただでさえ双方ともに互いに対する認識や印象が悪いのに交流会なんて面倒な事態が発生するのが目に見えているからだ。
「しかしそうでもしないと今後の作戦行動で支障が出かねません。であれば双方が歩み寄るきっかけを作らねば」
「わ、分かりました。一応申請してみます」
　そうして駐屯地司令は訓練校に交流会を行わないか？と打診を行った。

　山百合女子衛士訓練学校　職員室
「む？どうされましたか校長？」

篁唯依らの教官である真田は職員室に次の授業の資料を取りに来たのだがそこで校長が難しい顔をして待っていたのだ。
「ああ、真田君ちょうどよかった。君にも伝えておかなければならないことがあってね」
「なんでしょうか？」
「ここ訓練校の近くに陸上自衛隊の駐屯地があるだろう？そこの部隊と今度交流会を行うこととなったんだ」
「じ、自衛隊ですか…あの後方支援しかしない腰抜け共とうちの生徒を会わせたくないのですが…」
実は真田教官は自衛隊を見下している典型的な元帝国軍人であったので前にこの案が来た際に反対していたのだ。
「そうは言ってもねこの前の駐屯地司令からの頼みではない。統合作戦本部長…つまり自衛隊トップからの打診なんだ」
「と、トップということは沖田ご令嬢ですか！」

ちなみに沖田家はすでに武家や貴族・華族ではないが五摂家とも関係が深く、天皇陛下に謁見できる数少ない家なので別格扱いされている。
「ああ。先日近くの駐屯地に視察に来られていたそうなんだが、近衛軍に入隊予定のうちの生徒と帝国軍や自衛隊に家族がいる他の学校の女子生徒とのいさかいが目立ったそうでね。このままでは今後合同軍事作戦行動を行う際に多大な悪影響を及ぼすと判断したそうなんだ」
「そ、そうでしたか…」
そういわれて真田教官は何とか納得した。

数日後…
「ねぇねぇいったい何なの？この空気？」
「さ、さぁ？」
ガヤガヤガヤガヤ！
「静粛にしろ貴様ら！」

シーン…

「…よし。貴様らにうれしい連絡だ！今日・明日の教義はなしとなった。その代わり自衛隊精鋭部隊との交流会が明日に予定されている!!」

「ええ!?」

「じ、自衛隊との…」

「静かにしろ！なぉ明日は沖田統合参謀本部長とアルトリア中部方面隊司令もご参加なされるそうだ！くれぐれも無礼のないようにしろ！では解散！」

ガヤガヤ・・・・

「ねぇねぇ。自衛隊って帝国軍や近衛の影に隠れて活動してる組織だよね？」

「ちょっと！言い方が悪いわよ！まぁ影が薄いのは同感だけど…」

「でしょ？大体ＢＥＴＡとの戦いにもあんま参戦してないくせにいっつも後方でうろうろしてんだよ？うちの兄も『身代わりには使えそうだがな』って笑ってたし」

そんな感じで自衛隊を見下す生徒が多い中、篁唯依は気を引き締めていた。

（自衛隊統合作戦本部長の沖田ってことはあの沖田家の当主！それに以前我が家に支援をしてくださったから無礼のないようにしないと！）

翌日

山百合女子衛士訓練学校の前には自衛隊の部隊が展開していた。交流会に参加するために全国の駐屯地から手の空いていて戦線に穴が開かない程度の部隊が招集されたのだ。

（悪く言えば暇であっただけだが…）

陣容は以下の通りである。

陸上自衛隊西部方面隊熊本女子戦車連隊

同普通科第十六普通科連隊二個分隊

東部方面隊第一レイバー大隊所属二個中隊教導官数名

であった。ちなみに全員大陸派遣経験有りの猛者ばかりでもある。
「では、沖田本部長我々は交流会をしつつ講演を行えばよろしいのですね？」
「ああ。私は君の後に講演することになっているからな、よろしく頼むぞ？西住まほ連隊長？」

人物設定

・沖田桜

沖田家現当主にしてこの世界の自衛隊における最高指揮官でもある統合作戦本部長兼陸将。

本来であれば最高指揮官は内閣総理大臣なのだが、この世界ではそこら辺を詰める前に米国が対ソ連用にと帝国陸海軍と近衛軍の存続を認めた為に自衛隊の元となった警察予備隊は放置された影響でそこら辺は緩いのだ。

転生者であるが、前世でＭｕｖ―Ｌｕｖを知らなかったので特に原作等は気にしていない。（むしろ軍や政府に手を焼いている上に対ＢＥＴＡ戦略の構築でそれどころではない）

基本的に部屋でだらだらしながらプラモデルを作っていたい怠け者だが、やらねばならない時はやる気を出す性格で、有事の際には市ヶ谷の統合作戦本部に残って指揮を取るので自衛隊員達からの支持は高い。

・アルトリア・ペンドラゴン・沖田

イギリス王家由来の血を引く元難民出身の少女。家族の都合で日本に来日していたがその際にＢＥＴＡの進攻に会い両親を失った。姉のモルガンと妹のモードレッドとともに難民キャンプで生活していたが、避難民が増えた際の混乱で迷子になって路上生活を余儀なくされていた際に当時、沖田家長女で視察中だった沖田に拾われて沖田家に入った。（後に姉と妹も沖田家に入った）

現在は沖田に恩を返そうと陸上自衛隊に入隊し、陸将補に任官。

当時西部方面隊の壊滅によって上級士官が壊滅的に不足していた影響で中部方面隊指揮官となり最前線で防衛の任に当たっている。なお補佐官として妹のモードレッドを任命しており、姉は統合作戦本部で尋問部隊の指揮官をしている。

・琥珀・翡翠

沖田家に使えているメイドさん姉妹。現在は沖田桜の補佐官を務

めている。姉の琥珀は謀略を好んでおり、たびたび周りを巻き込んで騒動を起こすが、有能であるので誰も強く咎められない。
妹の翡翠は基本的に姉よりも常識人だが、一度吹っ切れると何をしでかすか分からないので怒らせないようにするのが統合作戦本部の暗黙の了解となっている。

・長尾景虎
陸上自衛隊東部方面隊総司令を務めている陸将。槍技や剣技の達人で指揮官としてもとても有能な人物であるが手に終えないくらいの酒好きで仕事中でも暇であれば飲んでいる飲んだくれ。
とはいえ有能であり度々部下を巻き込んで宴会を開いて方面隊の空気を明るくしてくれるので部下からの信頼は厚い。

・織田信長　（通称ノッブ）
沖田家同様な織田家の現当主であり東部方面隊副司令。長尾の飲んだくれっぷりに振り回されている一人だが、何かとそんな生活を楽しんでいる。
戦車隊と特科隊（自走砲部隊）に精通しており、『対ＢＥＴＡ戦において戦車と自走砲を運用するなら彼女に頼れ』と言われているほど。

・西住まほ
元西部方面隊の熊本女子戦車連隊連隊長にして数々の優秀な戦車長を生んできた西住家の長女。日本にＢＥＴＡが上陸する前には９０式戦車（見た目と性能が現実世界の９０式なだけ）で大陸に派遣されていた経験があり、西部方面隊が壊滅した後は九州と中国地方を繋ぐ大橋にて遅滞戦闘を務め、原作よりも多くの人命を救い『自衛隊随一の英雄』と言われている。
ちなみに母と妹がおり現時点でも生存しているものの、父は帝国陸軍に所属していたがＢＥＴＡとの戦闘で戦死している。
母のしほは陸上自衛隊富士教導団戦車教導隊の隊長を務めており、妹は同じ熊本女子戦車連隊に所属予定だったが、着任直前に西部方面隊が壊滅したので東部方面隊の茨城女子戦車連隊に連隊長として所属した。

・島田愛里寿

東部方面隊帝都防衛師団所属の女子戦車連隊の連隊長。西住家に対を成す島田家の次女で天才と言われている。

彼女の現時点の不安は姉の美香が佐渡島の目の前にある新潟県に駐屯していることで姉を中央に呼び戻そうと手をまわそうとしている。

・海野ネモ　（ＦＧＯのネモ）

海上自衛隊第一護衛隊群司令官。背の低さから子供と間違われることが多いことが悩みな男子。海上自衛隊では数少ない水上戦闘能力を有している艦隊を預かっているので優秀な人材であることは間違いない。ただヨコハマ防衛の際に勝手にＧ弾を打って味方もろともＢＥＴＡを殲滅した米国の行動は理解はしているが部下同様許してはおらず、１２．５事件の時には対艦誘導弾を米第７艦隊に放とうとしていたというので結構過激。

・アリス　（モデル　ＳＡＯのアリス）

沖田家の分家に対ＢＥＴＡ戦の初戦の頃に引き取られたが義親や義兄姉全員が戦死してしまい、分家当主となった少女。現在は自衛隊技術試験隊にて空自にて運用する予定の無人戦闘機の研究を行っており、戦術機にも適応出来るかの研究もしている。

なお無人戦闘機に関しては既に試験機ができており、正式名称はＡＤＦ―１１。愛称として『フギン』と『ムニン』と名付けられているものの、整備士たちの間では『フギン』と『ムニン』に人と交流しつつ勉強していく自立型ＡＩを将来的に搭載することが噂程度ではあるが、知られているためか搭載されたら可愛がってやろうと考えて今のうちに二機まとめて『ふぎむに』と呼ばれるようになって搭載前なのに既に愛されている。

前日談二話　西住まほ連隊長

１９９７年　五月のある日
山百合女子衛士訓練学校
「今日は自衛隊との交流会か～。なに話すんだろうね～？」
「さぁ？でも一応大陸に派遣されていた歴戦の連隊長らしいわよ？」
「お前ら静かにしろ!!」
　自衛隊との交流会当日。篁唯依たちが普段教義を受けている教室において自衛隊の最精鋭部隊である熊本女子戦車連隊連隊長と沖田統合作戦本部長による講演が予定されていた。
「今回最初に講演していただくのは陸上自衛隊の西部方面隊熊本女子戦車連隊において連隊長を務めておられる西住まほ一等陸佐と同連隊において副連隊長を務めている逸見エリカ二等陸佐だ。これは武家社会という要塞において生活してきた貴様らが最初から平民主体で構成されてきた自衛隊との価値基準の差と双方の実情を知るよい機会となるのだ！今日の朝礼で校長が言っておられたようにくれぐれもめごとは起こさずにしっかりと聞くように！」
「「「はい!!」」」
　そうして彼女たちが返事をしてから十分ほどのトイレ休憩ののちに講演が始まった。
「失礼する」「失礼するわ」
　そういって入って来た二人に山百合女子衛士訓練学校の生徒たちは驚いた。なにせ二人は自分たちと同じ高校生くらいの年齢ようでしかも一人は銀髪という日本人に見えない容姿だったので当然だが…
「さて。自分が陸上自衛隊西部方面隊所属の熊本女子戦車連隊連隊長を務めている西住まほだよろしく頼む」
「同じく陸上自衛隊西部方面隊所属の熊本女子戦車連隊副連隊長を務めている逸見エリカよよろしく」

そうしてまほとエリカは自己紹介を終えてまほが講演を開始した。
「さて、諸君は自衛隊についてどういう印象を持っているのかを確認しておこうか…そこの生徒！言ってみろ」
「はっはい！」
そうしてまほに指名された生徒は言い始めたが…
「え、え～と。『落ちこぼれ』『寄せ集め』『予算の無駄使い』『無駄飯食らい』『金食い虫』あと…」
「あ、あ～。そこまで言わんでいい。まぁそんなところか」
「相変わらずひどいですね」
そう。本土におけるＢＥＴＡ戦が始まっていなかったこのころは自衛隊に対する印象は最悪の一言で、下手すれば近衛軍に入隊予定の武家子嬢への評価より悪かったのだ。
「まぁ諸君らが所属する近衛軍や帝国軍のように我が自衛隊は伝統のある組織ではないし、帝国本土防衛軍の格下のような立場や軍よりの他の組織に近い点からもそう言われても仕方がない部分もある。しかし、本来我々自衛隊は出動しないほうがよいのだ」
「と、いうと？」
「本来なら私たちは活躍してはいけないのよ」
まほとエリカの発言に生徒たちは困惑した。なにせ帝国軍や近衛軍が大活躍している上に国税を使っている組織のはずなのに活躍しなくていいとは？
「そもそも我々が活躍、もしくは全力出動したということはそれだけ国が切羽詰まっておらず、平和であるということだ。我々自衛隊のモットーは『平和を守る』だ。税金泥棒と言われていた方がいいのさ」
彼女の発言は自衛隊の本質を表していると言えよう。
帝国軍・近衛軍が鉾とするならば自衛隊は盾と言えるのだ。
本土防衛軍も本質的には盾であるが、鉾でもあるので自衛隊はまさに国土を守る大盾と言える。
「さて、私とエリカは大陸派遣部隊として大陸にてＢＥＴＡと戦ったがひどいなんてものではなかった」
そうしてまほは対ＢＥＴＡ戦について語りだしたがその内容は生

徒らを恐怖させるものであった。
「我々自衛隊には戦術機なんて贅沢な物はないからな、戦車や機動力で戦術機に劣っているレイバーで交戦する羽目になったのだが、友軍部隊は次々にＢＥＴＡの餌食になっていったぞ？我々の部隊は運よく損害なしで後退できたがそれはただ運がよかったに過ぎない」
　そう。まほは大陸での撤退戦の功績から『自衛隊の中で英雄に最も近い連隊長』という評価を受けていたが本人としてはほかの部隊が犠牲になって自分たちが生き残ってしまったという思いが強かったのだ。
「近くで展開していたアトラスと機械化歩兵を主力にしていた部隊は最も悲惨だったぞ？アトラスのコックピットは戦闘機と同じ強化ガラスを使用したキャノピーだぞ？そこを戦車級に破壊されて食われるか自決を迫られた隊員もいたんだ。うちのレイバーは戦術機のような高機動戦闘を想定しておらんせいで一度接近されると逃げられんからな」
（このアトラスとは９７式装甲戦闘レイバー『アトラス』のことだが正規に正式化されたのはこの講演会の数日前のことであり本当は７７式撃震より前に試験的に大量生産されて試験運用されていたのを大陸派遣部隊の一部に配備していたのだ）
「そうでしたね。何度仲間の隊員を見捨てざる負えなかった事か・・・」
　エリカもその光景を思い出したのか遠い目をしていた。
「まぁとにかくだ。諸君はこの安全な後方にある学校で学んでいる間はいいだろうが、諸君らも後々に戦術機に乗って戦線に立つことが来るだろう。戦場ではいつＢＥＴＡに食い殺される可能性があるということと油断は命取りということだ」
　彼女の言葉は生徒たちに強く心に残った。